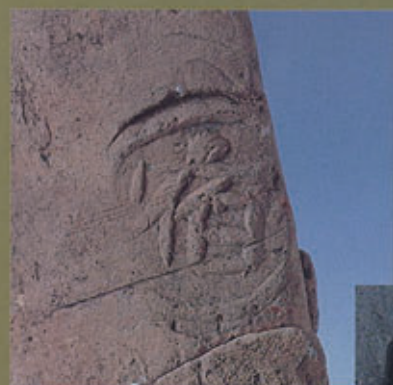




# 企画展

# も じ がわら 文 字 瓦

## を考える



鈴鹿市考古博物館  
Suzuka Municipal Museum of Archaeology





古代の寺院や官衙に使用される瓦は、形によって丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦などに分類されます。これら古代の瓦には文字が記されることがあり、瓦の種類とは別に「文字瓦」と呼ばれます。文字瓦には瓦に文字が刻まれる場合と墨などで書かれるばあいがあり、本書では前者の文字瓦を扱います。

文字が刻まれた瓦は大きく分けて、以下の3種類の方法によるものがあります。

1. ヘラなどによって瓦に直接文字を刻んだもの（ヘラ書き文字瓦）
2. 文字を刻んだ印を押したもの（押印文字瓦）
3. 瓦の製作具に刻んだ文字が製品である瓦自体に転写されたもの

さらに3は、平瓦を製作するときの台に刻んだ文字が転写したもの、軒瓦の瓦当範に刻んだ文字が転写したもの、瓦を叩き締める板に刻まれた文字が転写したものがあります。

記された文字の内容は様々で、人名・地名・役所名・年号などがあり、以下のように分けられます（上原2002）。

- ① 作瓦を記念して、年号や由来、作者などを記した銘文的文字瓦
- ② 工人の賃金支給や労務管理など、工房の経

営にかかわる文字瓦

- ③ 製作した工房名やそれを管轄する役所名、あるいは供給先や使用場所など需給関係にかかわる文字瓦
- ④ 造瓦を負担した土地や人の名を記した文字瓦
- ⑤ 瓦を寄進するなどの仏教的作善行為＝知識にかかわる文字瓦
- ⑥ 落書・習書にかかわる文字瓦

⑤の知識瓦として最も有名なものは大阪府堺市の大野寺跡及び土塔のヘラ書き文字瓦です。大野寺は、奈良時代の僧行基が建立した四十九院の一つです。土塔は大野寺境内に造られたピラミッド型の塔で、土を積み上げて造られた特異な建造物です。

大野寺跡出土の文字瓦は土塔に葺かれていたもので、文字の内容は人名がほとんどです。これらの名前には姓を持たない一般民衆、僧尼、姓を持つ豪族などがあり、行基に従って寄進した人々が様々な階層に亘っていたことを知ることができます。平安末期に著された『行基年譜』によると大野寺の建立は神亀4（724）年のことと伝えられますが、ちょうど同年の文字が記された軒丸瓦も出土しています。



土塔 国指定史跡 大阪府堺市土塔町



軒丸瓦 「神亀四年卯年二月」の銘がある  
大野寺跡（大阪府堺市） 堺市立埋蔵文化財センター所蔵・提供



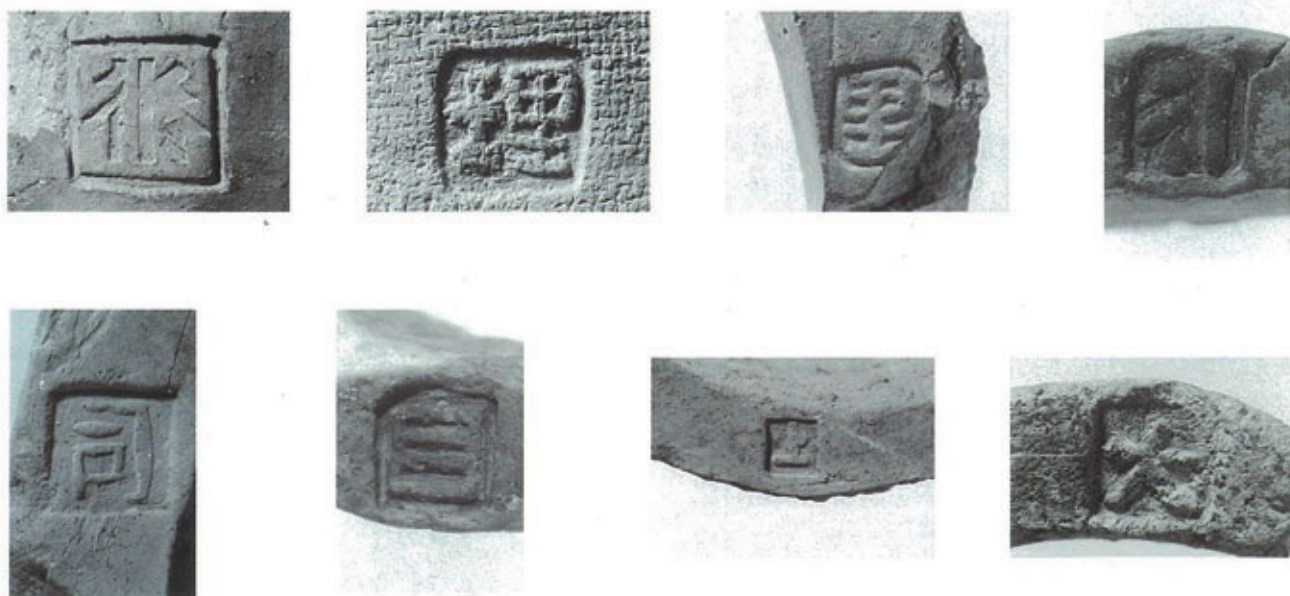


ヘラ書き文字 大野寺跡（大阪府堺市） 堺市立埋蔵文化財センター所蔵・提供

「丹比連廣×」「生マ多口万×」「蓮光」「福賢」「老女」は人名。「口千四百四十入」は窯入れ数をあらわすものか

③に關係する文字瓦としては平城宮跡のものが  
あります。8世紀前半では軒丸瓦に施された「北」  
の押印や軒平瓦に記された「東」のヘラ書き、  
「井」・「私」などの押印があります。数が非常  
に少ないのが特徴で、文字は生産工房である瓦屋  
を示したものととも考えられています。8世紀後半で  
は「修」や「理」など修理關係の押印文字瓦があ

ります。令外の官職である「修理司」に關係する  
ものとされます。その他、「修」・「理」の扁や  
旁だけのものや「目」・「在」・「公」・「上」・  
「大」などの押印文字瓦があります。後者には、  
宮内省管轄の役所で、修理司とともに造営・營繕  
に携わった木工寮に關わるものが含まれると推定  
されています。



押印文字 平城宮跡（奈良県奈良市） 奈良文化財研究所所蔵・提供

8世紀後半。「修」「理」「里」「𠂔」「司」「目」「上」「大」

②の代表例として恭仁宮跡の押印文字瓦があります。印面が細長い木製印が使われ、人名が書かれ、26種類に及びます。この恭仁宮式文字瓦は瓦の製作技法から同一工場の作品で、印種ごとに押印位置や方向が同じであることから、印に記された人名は瓦を作った工人の名前を表すものであることが分っています。恭仁京は奈良時代、平城京から一時的に移った都で、恭仁宮式文字瓦は、恭仁宮が造営された天平12～15（740～743）年と

いう短い期間に製作されたものでした。官営工房内において常勤工の製品と区別するため、出来高支払制に基づく雇工が押捺したものと解釈されています。

恭仁宮はのちに山城国分寺に施入され、大極殿は金堂になりました。その際新たに建てられた七重塔には恭仁宮式文字瓦は使われませんが、還都後の平城宮では突然建設中止となった恭仁宮用に準備された瓦が流用されています。



押印文字 恭仁宮跡（京都府相楽郡加茂町） 京都府立山城郷土資料館所蔵  
左から「真依」「神人」「古」「土師」「足得」

その他④に関わるものとして郡名が記された陸奥・下野等東国国分寺における文字瓦があります。国分寺の造営に際し、郡という行政単位ごとに瓦が貢進されたことを示すもので、その背景として律令期以前における貢納制の伝統や行基の活動に代表される「知識」の隆盛が考えられます。

それでは伊勢国府や国分寺から出土する押印文字瓦はどのような性格を持つのでしょうか。国分寺のみに認められる文字瓦「勾」は「川勾（河曲郡）」を示す可能性があります。「宿」「水」「小」

など文字種で20種を越える国府の文字瓦は郡名を表したものと考えられず、人名の一部を印としたものでしょう。人名ならば、最初に掲げた文字瓦の性格のうち②の工人、④の造瓦負担者、⑤の知識結への参加者のどれかになります。さらに官衙の場合、仏教的な作善行為である⑤はなじまないで②か④に絞られます。ともあれ現代に伝わるものが少ない古代の人々の氏名を記した可能性がある史料として意義があるのは確かです。



## 付論一 伊勢国府・国分寺系文字瓦

はじめに

**伊**勢国府跡（長者屋敷遺跡）と伊勢国分寺跡には多くの文字瓦が知られている。すべて、瓦の製作時に白文（陰刻）印や朱文（陽刻）印を押した押印文字瓦である。長者屋敷遺跡に文字瓦が存在することは早くから注目されていた<sup>註1</sup>。文字瓦を含む瓦類の分布状況や文字瓦の概要も詳しく報告され、20数種類の文字数が知られている<sup>註2</sup>。北方官衙や西院を中心に発掘調査による資料の蓄積も進んだ<sup>註3</sup>。

伊勢国分寺でも僧寺と推定される史跡指定地や推定尼寺関連の国分遺跡（北院）・国分西遺跡などで発掘資料が得られ、とくに指定地東半の塔推定地からはまとまった数の出土があった<sup>註4</sup>。さらに鈴木敏雄・伊東富太郎・田中安一ら先学諸氏による採集資料を併せれば、現在実物を観察できる伊勢国府・国分寺系文字瓦は400点を越える。押印対象となる瓦の形式・技法は、丸瓦が玉縁式、平瓦が一枚作りである。

これまでこれらの文字瓦に関する分類作業は不完全で、資料の全貌も不明であった。本稿では伊勢国府・国分寺系文字瓦の観察結果に基づき、型式設定を行い、国府・国分寺造営にかかる瓦生産の実態や需給関係を議論するための基礎資料を提示する。

### 分類の方針

**押**印文字瓦の分類にあたっては、施印原体すなわち印類そのものの異同を明らかにすることを目的とした。施印された瓦自体には製作技法の違いにより類型化が可能であることが予想されるが、押印文字と瓦の製作技法との対応関係は作業の前提として必ずしも固定できない。そこで文字瓦の分類基準は施印原体と対応関係にある押印部分のみを対象とし、瓦自体の分類や製作技術は不問とした。

分類されたそれぞれの型式は、相互に型式群として上位の分類群を構成することがある。例えば「人」という釈文が与えられる文字瓦は原体の違いにより複数型式存在することが知られ、これらはひとつの型式群として把握することが可能である。

この場合、上位の型式群を表示するような型式名称を与えることも可能であろう。ところが文字瓦には釈読不能なものや見方によって釈文が異なる場合もある。よってのちに変更の可能性がある型式名称は極力避けることが望ましい。

本稿では型式設定時に明らかな属性のみをローマ数字とアルファベットで表し、認定順にアラビア数字を組み合わせることとした。ローマ数字は印の幾何学的な平面形状に従い、Iは丸印、IIは角印を表す。アルファベットは印面の周縁により、Aは普通タイプ、Bは沈線がめぐるもの、Cは陽出された圏線である浮線がめぐるものである。同様の命名様式は国府・国分寺系の軒瓦についても実施しており、これらの記号のみでは混同も危惧されることから、軒丸瓦・軒平瓦・文字丸瓦・文字平瓦を明示できる符号が必要となる。そこで型式名の前に瓦の種別を必要に応じて付加することとしたい。すなわち伊勢国府・国分寺系軒丸瓦はIRE、同じく軒平瓦はICE、文字丸瓦はISR、文字平瓦はISCというような種別を表す記号を加える。

一方で、同字異印の文字瓦型式群を扱う際、釈文を明示的に取り込んだ型式名称も分かりやすい。そこで「宿A」や「宿B」など型式名に準ずる通称を与え、型式名と併せて使用してはどうか。これらの通称は釈読によっては今後変更されることもありうるし、釈読が困難な場合は近い文字で仮に呼称する場合もある。暫定的な名称として正式な型式名と併用することとしたい。

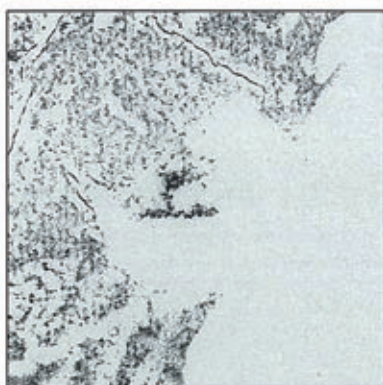
### 用語の説明

**伊**勢国府跡（長者屋敷遺跡）で最も特徴的に認められる押印文字瓦を伊勢国府式文字瓦と呼ぶ。伊勢国府式文字瓦は、三宅神社遺跡や梅田遺跡など国府関連遺跡にも少数見られる。伊勢国分寺跡で出土する文字瓦の大半も伊勢国府式文字瓦であるが、例えば凹面狭端付近に押印される一群のように国分寺のみに存するものもある。これらを伊勢国分寺式文字瓦と称することにする。本稿でもすでに使用してきた伊勢国府・国分寺系文字瓦とは伊勢国府式と伊勢国分寺式文字瓦の総





I SC・IA29 (上D)



IA29 (上D) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円。天側から5分の3に  
印文を配し、大きく左に偏る。  
第1画は右下がり。

水平方向でほぼ中央の狭端寄  
りに押印される個体がある。



I SR・IA09 (上E)



IA09 (上E) 丸瓦。陽刻。  
正円。上の裏文字。印文はわず  
かに右に寄る。字画は太く、第  
2・3画に相当する部分は短い。  
横位に木目が観察できる。

押印箇所が分かる個体では垂  
直方向ほぼ中程に押印される。



I SR・IA13 (百)



IA13 (百) 丸瓦。陽刻。ほ  
ぼ正円。第1画は右上がり。国  
分西遺跡出土の1例のみ知られ、  
凹面は狭端に沿ってヨコ調整さ  
れる。

垂直方向中央よりやや玉縁寄  
りに押印される。



I SR・IA19 (羊A)



IA19 (羊A) 丸瓦。陰刻。  
ややいびつな円形。印文は地側  
にやや偏る。第1画よりも2画  
の方が大きい。6画は太く、そ  
の末端は印面縁辺に接する。

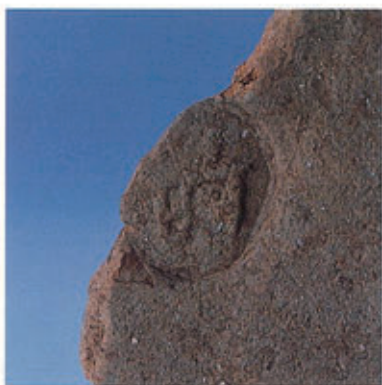




I SC・IA02 (小B)



IA02 (小B) 平瓦。陽刻。  
印面はほぼ正円で、1画は右に偏る。2・3画は円形で、3画より2画が大きい。2画上部に縦位の傷が発達する。押印位置が分る個体では、垂直方向でほぼ中央に、水平方向で中央右寄りに施印されている。



I SR・IA03 (前A)



IA03 (前A) 丸瓦・平瓦。  
陽刻。正円に近い。「巴」の裏文字とされることもあったが<sup>註6</sup>、「前」の第1・2画に相当すると見られる部分が明白に認められる。「月」及び「リ」の部分異なる「前」の異体字の可能性が考えられる。

丸瓦では灰色でやや軟質に焼成されるものが多い。



I SC・IA03 (前A)



I SC・IA21 (前B)



IA21 (前B) 平瓦。陽刻。  
隅丸方形に近く、前Aより印面・印文ともに大きい。字画の構成は前Aと同じである。「巴」の裏文字とされたが<sup>註7</sup>、前Aと同様に「前」の異体字の可能性はある。凸面の縄タタキは粗い。押印位置が分る個体では、垂直方向でほぼ中央に施印されている。





I S R・I B02 (人A)



I B02 (人A) 丸瓦。陰刻。正円形。印文は印面の天側約3分の2に収まる。整った楷書である。第1画はやや左に偏り、第2画のはらいは大きく、力強い。

押印位置が分かる個体には、垂直方向でほぼ中央に押印されるもの、玉縁側に寄るものがある。



I S R・I A05 (人B)



I A05 (人B) 丸瓦。陽刻。正円形。印文はわずかに左寄りに配される。字画は同じ太さで、第2画のはらいは直線的。

押印位置が分かる個体には、垂直方向でほぼ中央に押印されるものと玉縁側に寄るものがある。



I S C・I A06 (人C)



I A06 (人C) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。印文は印面の天側約3分の2に収まる。第1画は中央からやや左に寄る。

砂礫を多く含むものが目立つ。押印位置が分る個体では、ほぼ中央に押印されている。



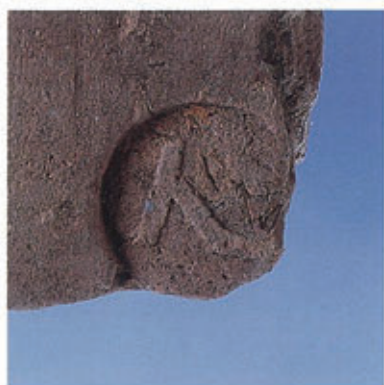
I S C・I A07 (人D)



I A07 (人D) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。印文は印面の天側約5分の3に収まる。第1画は左に偏り、2画のはらいは大きく屈曲する。

概して砂礫を多く含む。ほぼ中央に押印されていることを示す個体がある。





ISR・IA04 (人E)



IA04 (人E) 丸瓦。陽刻。  
ほぼ正円。印文は印面中央に配される。字画はほぼ同じ太さである。第1画は左に大きく偏り、2画の右はらいは曲線的である。



ISR・IA10 (上A)



IA10 (上A) 丸瓦。陽刻。  
正円。印文は印面中央に配される。字画は太く、第3画は短い。横位に木目が見える。  
灰色に焼成されるものが多い。  
垂直方向の押印位置は中央やや玉縁側に近いものと広端側に近いものがある。



ISC・IA11 (上B)



IA11 (上B) 平瓦。陽刻。  
いびつな円形。印文は印面地側に寄る。上Cと比べ印面は小さく、第3画は短い。深く押印される例が目立つ。  
灰色に焼成される。



ISC・IA18 (上C)

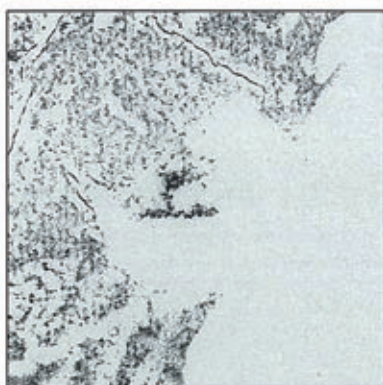


IA18 (上C) 平瓦。陽刻。  
ややいびつな円形。第1画は印面の中央わずかに左寄りに配され、第3画は左端が長く、やや左下がり。  
胎土には概して砂礫が目立ち、器厚が薄い。  
ほぼ中央に押印されていると考えられるもの、水平方向中央の狭端寄りに押印されるものがある。





I SC・IA29 (上D)



IA29 (上D) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円。天側から5分の3に  
印文を配し、大きく左に偏る。  
第1画は右下がり。

水平方向でほぼ中央の狭端寄  
りに押印される個体がある。



I SR・IA09 (上E)



IA09 (上E) 丸瓦。陽刻。  
正円。上の裏文字。印文はわず  
かに右に寄る。字画は太く、第  
2・3画に相当する部分は短い。  
横位に木目が観察できる。

押印箇所が分かる個体では垂  
直方向ほぼ中程に押印される。



I SR・IA13 (百)



IA13 (百) 丸瓦。陽刻。ほ  
ぼ正円。第1画は右上がり。国  
分西遺跡出土の1例のみ知られ、  
凹面は狭端に沿ってヨコ調整さ  
れる。

垂直方向中央よりやや玉縁寄  
りに押印される。



I SR・IA19 (羊A)



IA19 (羊A) 丸瓦。陰刻。  
ややいびつな円形。印文は地側  
にやや偏る。第1画よりも2画  
の方が大きい。6画は太く、そ  
の末端は印面縁辺に接する。





I SC・IA14 (羊B)



IA14 (羊B) 丸瓦。陽刻。  
いびつな円形。印文はやや右寄りに配され、天地ともに印文と接しない。第1画より2画の方が小さい。羊Aより小さい。



I SR・IA20 (大A)



IA20 (大A) 丸瓦。陽刻。  
正円形。印文は天側に偏る。第1画は直線的。3画の右払いは2画の起端からはじまり、弱々しい。



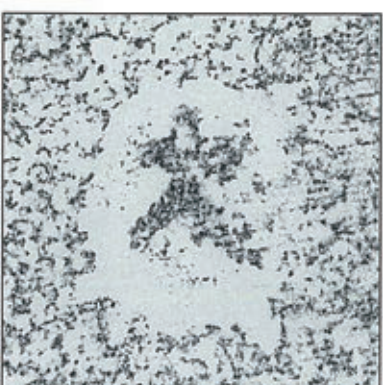
I SR・IA25 (大B)



IA25 (大B) 丸瓦。陽刻。  
やや歪みのある円形。地側はやや広く空く。印文は丸みを帯び、第1・3画の中央が膨らむ。3画の起端付近に縦の傷がある。  
押印位置の分る個体では垂直方向中央に施印される。凹面広端側が縁辺に沿って調整される例がある。



I SC・IA33 (大C)



IA33 (大C) 平瓦。陽刻。  
地側が膨れる楕円形。印文は印面の中央に配され、太く、大きい。





I SR・IA32 (大D)



IA32 (大D) 丸瓦。陽刻。  
楕円形。天側から4分の3に印  
文が収まる。第3画は“止め”  
状となる。左下がりに木目が観  
察できる。伊勢国府跡の1点の  
み知られる。



I SR・IA23 (手A)



IA23 (手A) 丸瓦。陽刻。  
わずかに歪みのある円形。印文  
は地側に偏る。第2画は右下がり、  
4画は左払い状。縦に木目が見  
える。印上で分割されている例  
がある。



I SC・IA28 (手B)



IA28 (手B) 平瓦。陽刻。  
やや角張った楕円形。右上がり  
の第3画は急角度で、4画は左  
払い。  
砂礫を多く含む。



I SC・IIA04 (手C)



IIA04 (手C) 平瓦。陽刻。  
隅丸方形。印文はほぼ中央に配  
される。第2・3画は水平、4  
画は左払いとなる。  
凸面の縄タタキは弱く、軟質で、  
淡黄灰色に焼成される。  
ほぼ中央に施印されていると  
考えられる個体がある。





I SC・IA34 (手D)



IA34 (手D) 平瓦。陽刻。  
やや歪みのある円形。右上がりの第1～3画は平行に配される。出土地不詳の1点のみが知られる。



I SC・IIA07 (手E)



IIA07 (手E) 平瓦。陽刻。  
隅丸方形。手Cよりも角張る。印文は印面の右に偏り、第2・3画の終端は右に接する。1画と印面天側周縁との間隔は狭い。ほぼ中央に押印される。



I SR・IA24 (川A)



IA24 (川A) 丸瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。第1画は明確な左払いとならず、3画とも懸針もしくは像笏状。印面には横位に強く木目が残る。

凹面広端側が水平方向に調整されているものがある。

押印位置が分る資料では中央やや広端寄りに施印される。



I SC・IA22 (川B)



IA22 (川B) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。字画の太さはほぼ一定で、第3画の起端は1・2画よりも上位にある。天地が逆で、裏文字の可能性はある。





I SR・IA26 (中A)



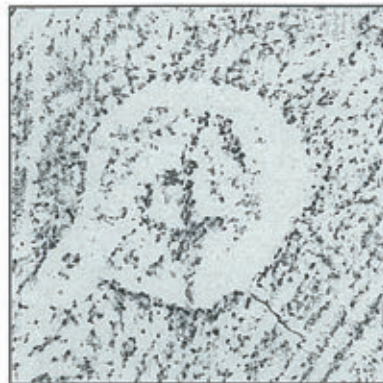
IA26 (中A) 丸瓦。陽刻。  
歪んだ円形。縦画は直線的で、  
やや左に寄り、天地とも周縁に  
接する。右払い状の部分は長く、  
やや内湾する。釈文は「中」と  
されることが多いが、中B～D  
とともにはっきりしない。

灰色に焼成される。

押印位置が分かる例では玉縁  
寄りや中央に施印される。



I SC・IA12 (中B)

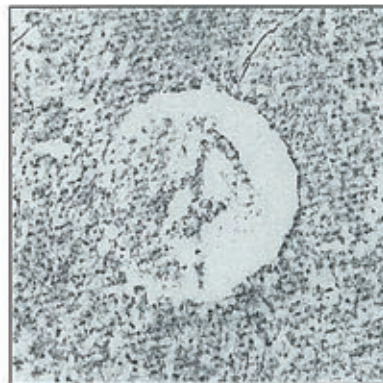


IA12 (中B) 平瓦。陽刻。  
やや歪んだ円形。縦画は印面の  
中央に配され、その起端は右に  
曲がり、終端は周縁に接する。  
縦画と横画が交わる部分は太い。  
最も多く確認されている型式。

狭端から6～9cmの付近に施  
印される例が多いのが特徴的。



I SR・IA27 (中C)



IA27 (中C) 丸瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。縦画の終端は周縁  
に接する。中Bに似るが、縦画  
の上半が大きく右に折れる。

押印位置が分る例では中程か、  
やや玉縁寄りに施印される。



I SR・IA35 (キ)



IA35 (キ) 丸瓦。陽刻。ほ  
ぼ正円形。片仮名の「キ」状の  
印文。縦に木目が観察される。

出土地不詳の採集資料1点が  
知られ、垂直方向でほぼ中央に  
施印される。

四日市市立博物館所蔵



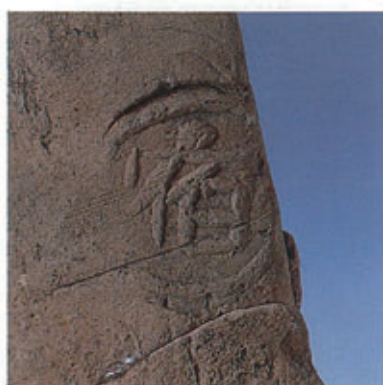


I SC・IA08 (内)



IA08 (内) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。「中」各種と同文である可能性も考えられる。IA12中Bに次いで例数が多い。印文は印面の天側に偏る。

ほぼ中央に施印されていることが分る例がある。



I SR・IC02 (宿A)



IC02 (宿A) 丸瓦。陽刻。ほぼ正円形。印文は印面の天側に寄る。第6画を欠く「宿」の異体字で、宀+イ+白。1画は円形。2画と3角は離れる。8画の起端下には突起部分がある。

押印箇所がわかるものは垂直方向で、中央10cmほどの間に押印されるものが多いが、やや広端側によるものもある。凹面広端側は水平方向に調整される。



I SC・IC01 (宿B)

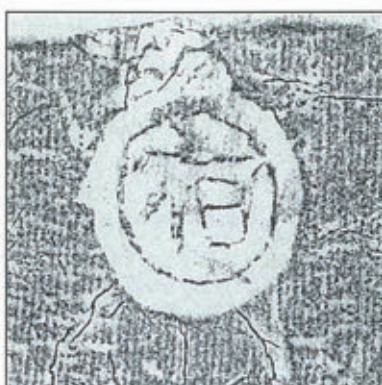


IC01 (宿B) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。印文は印面右側に寄り、圏線と接する。第6画を欠く「宿」の異体字で、宀+イ+白。同文型式群の中では印面・印文ともに最大。

ほぼ中央に押されていると考えられる例が知られる。



I SR・IC08 (宿C)



IC08 (宿C) 丸瓦。陽刻。ほぼ正円形。印文は印面天側4分の3に配され、天地方向に潰れた字体。第6画を欠く「宿」の異体字で、宀+イ+白。第3画は中央が太い。

淡黄灰色や灰色を呈するものが多い。

押印箇所がわかるものは垂直方向で、ほぼ中央や玉縁寄りに押印される。凹面広端側は水平方向に調整される。





I SR・IC09 (宿D)



IC09 (宿D) 丸瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。第7画を欠く「宿」  
の譌字か。宀+イ+一+日。印文  
は左に偏る。3・6画の終端、  
8画の転折部分が接する。



I SR・IC10 (宿E)



IC10 (宿E) 丸瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。第6画を欠く「宿」  
の異体字で、宀+イ+白。印文  
は印面天側へ大きく偏る。字画  
は細い。

垂直方向で中央やや広端側に  
寄った部分に施印されていると  
考えられる個体がある。凹面広  
端沿いの調整は無い。



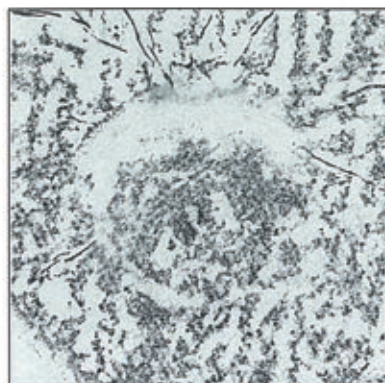
I SC・IC14 (宿F)



IC14 (宿F) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。第1画は圏線に接し、  
3画とは離れる。字画は全体に  
太いが、6画は細い。

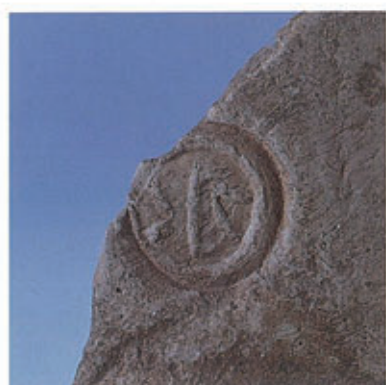


I SC・IC15 (宿G)



IC15 (宿G) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。第6画を欠く「宿」  
の異体字で、宀+イ+白。4・  
5画の「イ」は「人」形。6画  
の終端は左に突き出る。





ISR・IC11 (水A)



IC11 (水A) 丸瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。印文は、第1画のはねが右を向くので、「水」の裏文字と考えられ、印面の地側に偏る。第3・4画と1画は離れ、3・4画は圏線に接する。国府跡採集の1点のみが知られ、須恵質。



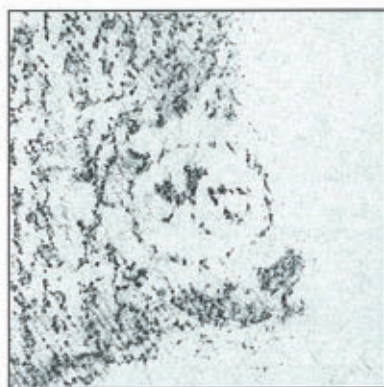
ISC・IC05 (水B)



IC05 (水B) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。「水」の正字と考えられる。第2・3画の起端は圏線に接する。1画と3・4画は接し、3画は左上がりである。圏線は太い。



ISC・IC07 (水C)



IC07 (水C) 平瓦。陽刻。  
潰れた円形。第1画のはねが右を向く裏文字。印文は印面のやや天側へ寄る。1画と2画及び3・4画は接する。字画は太い。  
ほぼ中央に施印されていると考えられる資料がいくつかある。



ISC・IC21 (水D)



IC21 (水D) 平瓦。陽刻。  
ほぼ正円形。裏文字と考えられる。1画の起端とはねは大きく右に延びる。1画と3・4画、1画のはねと2画のはらいは接する。字画は細い。  
ほぼ中央やや狭端寄りに押印されているものがある。

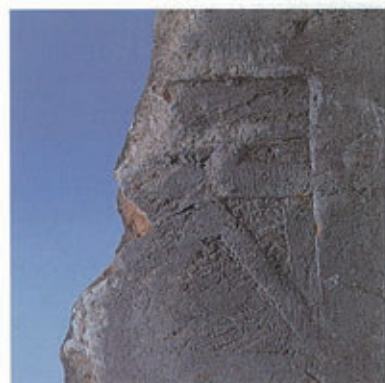




I SR・II A05 (守B)



II A05 (守B) 丸瓦。陽刻。  
歪んだ方形。守の裏文字と考えられる。第1画と2画の間が空く。  
「ム」と「寸」の間が空く。縦に木目が観察できる。  
焼成はII A02守Aと似る。



I SR・II A06 (天)



II A06 (天) 丸瓦・平瓦。陽刻。  
やや歪んだ長方形。字画の起終端は周縁に接し、直線的。右上がり斜め方向に木目が観察できる資料がある。  
丸瓦では垂直方向で広端から6 cm程に押印される例がある。



I SC・II A06 (天)



I SC・IA15 (TA)

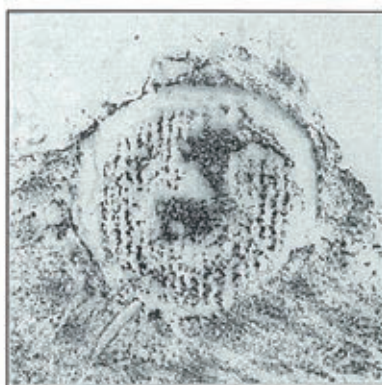


IA15 (丁A) 平瓦。陽刻。  
不整円形。釈読は難しいが、「丁」と解される。第2画のはねは大きい。  
表面に炭素が吸着したものが目立つ。  
中程に押印されていると考えられる資料がある。





I SC・IA16 (TB)



IA16 (TB) 平瓦。陽刻。楕円形。釈読は難しいが、「丁」と解される。第1画の先端は尖る。印面には印文を除いて布目圧痕が観察できる。この圧痕はどの個体でも同様のパターンを示すので、印類自体の転写であろう。したがって陶製印であったことが推定される註8。



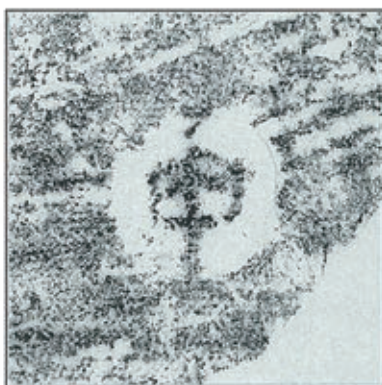
I SC・IA17 (申A)



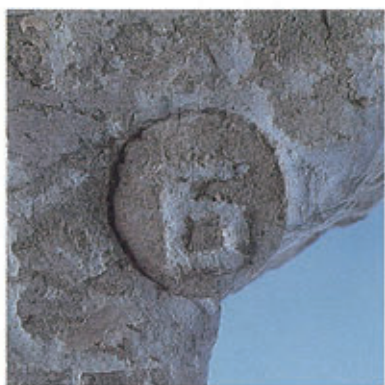
IA17 (申A) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。印文はやや右に寄る。中央の縦画の起・終端は周縁に接し、終端はやや左に曲がる。



I SC・IA31 (申B)



IA31 (申B) 平瓦。陽刻。やや歪みのある円形。IA17より印面径が小さい。印文は中央に配される。中央縦画起・終端は周縁に接し、終端はやや左に曲がる。



I SC・IA30 (石)



IA30 (石) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。釈読は難しいが、「石」に近い。印文は印面地側右に偏る。第2画は短い。縦に木目が観察できる。

国府跡の1点のみ知られ、狭端から9cm程に押印されている。





I SC・IB01 (領)



IB01 (領) 平瓦。陰刻。ほぼ正円形。印文は印面の右寄りに配される。字画はやや不明確な部分があるが、「領」と解されてきた。第1画の左はらいは長い。

国分尼寺瓦窯関連の川原井遺跡例は狭端から15cmに押印される。



I SC・IC03 (ㇿ+?A)



IC03 (ㇿ+?A) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。釈読できないが、「ㇿ」に従うと考えられる。

「宿」が崩れたものかもしれない。垂直方向で中ほどに押印される例がある。



I SC・IC18 (ㇿ+?B)



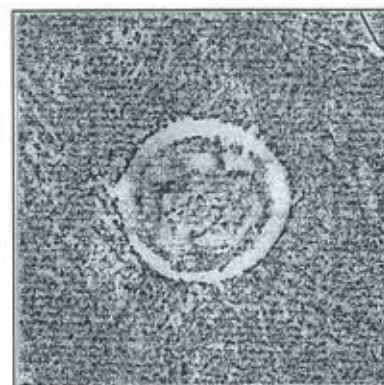
IC18 (ㇿ+?B) 平瓦。陽刻。ほぼ正円形。釈読できないが、「ㇿ」に従うと考えられる。

押印が浅く、かつ未調整のまま押される例が多いため不鮮明。IC03と同じく「宿」が崩れたものか。

狭端寄りに施印されていることを示す例がある。



I SR・IC04 (ㇿ+?C)



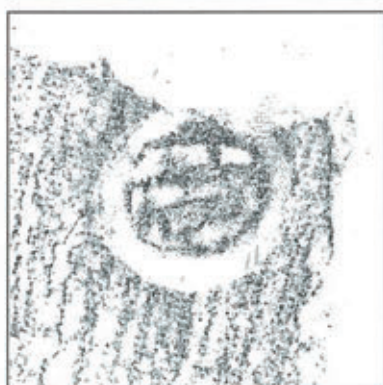
IC04 (ㇿ+?C) 丸瓦・平瓦。陽刻。やや潰れた円形。釈読できないが、「ㇿ」に従うものであろうか。IC03やIC18と同様「宿」が崩れたものである可能性がある。

丸瓦で玉縁寄りに施印される例がある。





I SC・I C04 (ㄥ+?C)



I SC・I C06 (三)



I C06 (三) 平瓦。陽刻。下膨れの楕円形。字画は全て太く、短い。第1画は起端が周縁に接し、2・3画は終端が周縁に接する。垂直方向で中ほどに押印されていると推定できる個体がある。



I SC・II A01 (勾A)



II A01 (勾A) 平瓦。陽刻。ほぼ正方形。第1画は垂直に近い。「ㄣ」のみで「厶」の表現は見られない。国分西遺跡の1点のみが知られる。  
凹面は狭端に沿って横方向に調整される以外は布目残り、凸面は密に縄叩き調整が施され、側縁の面取りは2面であるなど、伊勢国分寺系瓦の中で極めて個性的。押印は凹面狭端付近の中央に正位に施される。



I SC・II A03 (勾B)



II A03 (勾B) 平瓦。陽刻。ほぼ正方形。II A01より大きい。第1画の終端は周縁に接する。  
国分寺跡のみに見られ、瓦や施印の特徴はII A01と同様である。「ㄣ」と積読されることもある。



## まとめ

**伊**勢国府・国分寺系文字瓦のうち伊勢国分寺式として区別できるのは、「勾」と釈読されるⅡA01とⅡA03で、平瓦のみに見られるものである。凹面狭端側中央に方向を揃えて押印されることに加え、瓦自体の技術的な特徴も際立っている。押印箇所は何らかの規範に従っているのかのごとく個体間のばらつきが少ない。ただし瓦の製作技法に同様の特徴を示しながら押印の見られない瓦も確実に存在する<sup>註9</sup>。川原井瓦窯跡群と国分西遺跡のみで出土するⅠB01類も生産遺跡での出土を重んじて、国分尼寺（北院）に関わる国分寺式として良い<sup>註10</sup>。問題は国分西遺跡に1点のみ見られるⅠA13百である。今のところ国府跡での出土例はないものの、本来的な供給先は断定できない。その他は国分寺跡や国分寺関連遺跡に認められる場合があっても、大多数が国府跡出土であることから伊勢国府式と判断される。

伊勢国府式文字瓦は瓦の種別を問わず、中央に押印される例が目立つが、型式別に見ると押印箇所が分る例は少ない。特徴的な押印箇所を示す例としてはⅠA12中Bがある。ⅠA12で押印箇所が明らかなものはいずれも狭端付近に施印される。

伊勢国府跡＝長者屋敷遺跡においては文字瓦の分布に偏りが認められることが指摘され<sup>註11</sup>、発掘調査の進展によってさらに鮮明になりつつある。

最も集中して文字瓦が出土するのは方格地割が認められる北方官衙である。とくに仲土居南地区や長塚北東地区に濃厚に分布し<sup>註12</sup>、とくに前者は発掘調査においても多くの出土を見た。国府跡の南端に位置する政庁では文字瓦がほとんど見られず<sup>註13</sup>、政庁のみに特徴的な薄手・精製の平瓦や細型の丸瓦に文字押印が認められることは無い。その一方で政庁の西に隣接して確認された西院からは多くの文字瓦が得られている<sup>註14</sup>。伊勢国府における各官衙の建設がどのような工程で進行したかは詳らかではないが、政庁の建設段階では文字押印を伴う瓦の供給が無く、北方官衙や西院の建設段階では文字瓦が供されたことは事実関係として把握できる。国分寺跡や三宅神社遺跡等で見られる伊勢国府式文字瓦は北方官衙などに由来する再利用品であろう。

伊勢国府式文字瓦の性格については、これもすでに指摘されているとおり、郡名など地名との対比は難しく<sup>註15</sup>、人名の一部である可能性が考えられる。文字の種類は20種類を超え、同一文字であっても一部の例外を除けば丸瓦と平瓦で異なる型式の印が用いられることや、同文異印の型式群内において相互の識別が非常に難しいことが特徴である。各型式が製作技法や胎土、押印箇所等と対応関係にあるか否かという問題や押印率は今後の検討課題である。

## 註

1. 鈴木1933。
2. 村山1992。
3. 吉田2002など。
4. 林・藤原2003。
5. 同一個体に複数箇所押印される場合は、陰影ごとに1点と数えた。ちなみに2箇所押印される個体3点が含まれる。
6. 村山1992・25頁。
7. 岡田・新田1997・19頁。
8. 吉田2002・3頁。
9. 中森2003・54頁など。
10. 伊勢国分寺では僧寺（史跡）と尼寺（北院）で異なる瓦当が使用されている（浅尾1992）。文字瓦を含む丸瓦・平瓦も僧寺と尼寺とで供給元を異にしている

とすれば、伊勢国分寺式文字瓦は僧寺式と尼寺式に分けて把握することができのかもしれない。ちなみに国分西遺跡は尼寺推定地の西に隣接するが、僧寺とも近接するため僧寺の瓦を含む可能性もある。

11. 村山1992・30頁
12. 伊勢国府跡では調査成果に基づき、東西4区画、南北2区画に亘る方格地割の存在が想定されている（吉田2002・6頁）。ここでは小字名に基づき、西の南北2区画を仲土居北・南、中央4区画を長塚北西・北東・南西・南東、東の南北2区画を南野北・南と呼称する。
13. ただし、政庁の平瓦には、整形台に由来すると見られる陰刻状あるいは陽刻状の痕跡を凸面の狭端や広端付近に残すものがある（藤原他1995）。文字とは



異なるものの何らかの意図を持って付された記号である可能性がある。

14. 新田2000

15. 村山1992・30頁

#### 主な参考文献

浅尾悟1992『伊勢国分寺跡－尼寺跡推定地の調査－』（鈴鹿市教育委員会）

上原真人2002「奈良時代の文字瓦」『行基の考古学』塙書房

大阪府立狭山池博物館2003『行基の構築と救済』

岡田雅幸・中森成行・林和範・石田浩司2001『天王山西遺跡・三宅神社遺跡・梅田遺跡』（鈴鹿市教育委員会）

岡田雅幸・新田剛1997『伊勢国分寺・国府跡4』（鈴鹿市教育委員会）

堺市教育委員会2000『シンポジウム土塔－甕る古代のモニュメント－』

鈴木敏雄1933『三重縣古瓦図録』

中森成行2003「国分西遺跡（国分寺跡27次）」『鈴鹿市考古博物館年報第4号』

新田剛2000『伊勢国府跡2』（鈴鹿市教育委員会）

林和範・藤原秀樹2003『伊勢国分寺跡3』（鈴鹿市教育委員会）

藤原秀樹・新田剛・山本保志・清山健・辻公則1995『伊勢国分寺・国府跡2』（鈴鹿市教育委員会）

村山邦彦1992「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』第128号

山崎信二2003「平城宮・京の文字瓦から見た瓦生産」『文化財と歴史学』吉川弘文館

吉田真由美2002『伊勢国府跡4』（鈴鹿市教育委員会）

#### 主な展示資料

資料名	遺跡名	所在地	所蔵	備考
丸瓦	大野寺跡	堺市土塔町	堺市立埋蔵文化財センター	ヘラ書き文字瓦6点「生マ多〇万×」「老女」「〇千四百四十入」他
平瓦	大野寺跡	堺市土塔町	堺市立埋蔵文化財センター	ヘラ書き文字瓦7点「丹比連廣×」「蓮光」「凡海連」他
軒丸瓦	大野寺跡	堺市土塔町	堺市立埋蔵文化財センター	范文字瓦「神亀四年〇卯年二月〇〇〇」
平瓦	平城宮跡	奈良市二条町	奈良文化財研究所	ヘラ書き文字瓦「東」
軒丸瓦	平城宮跡	奈良市二条町	奈良文化財研究所	押印文字瓦「北」
軒平瓦	平城宮跡	奈良市二条町	奈良文化財研究所	押印文字瓦2点「井」「私」
丸瓦	平城宮跡	奈良市二条町	奈良文化財研究所	押印文字瓦7点「修」「里」「冬」「王」「上」「目」「大」
平瓦	平城宮跡	奈良市二条町	奈良文化財研究所	押印文字瓦4点「理」「司」「イ」「人」
丸瓦	慈仁宮跡	京都府相楽郡加茂町	京都府立山城郷土資料館	押印文字瓦4点「老」「太万呂」「足得」「日奉」
平瓦	慈仁宮跡	京都府相楽郡加茂町	京都府立山城郷土資料館	押印文字瓦10点「古」「真依」「宗我部」「六人」「神人」「中臣」「土師」
丸瓦		伝鈴鹿市	四日市市立博物館	押印文字瓦「キ」。伝鈴鹿市出土
平瓦		伝鈴鹿市	四日市市立博物館	押印文字瓦「宿」「〇〇〇」。伝鈴鹿市出土
丸瓦	伊勢国府跡	鈴鹿市広瀬町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「上」「人」「守」他
平瓦	伊勢国府跡	鈴鹿市広瀬町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「水」「上」「宿」他
丸瓦	伊勢国分寺跡	鈴鹿市国分町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「前」「小」「上」他
平瓦	伊勢国分寺跡	鈴鹿市国分町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「勾」「人」「上」他
丸瓦	国分遺跡	鈴鹿市国分町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「大」他
平瓦	国分遺跡	鈴鹿市国分町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「三」他
丸瓦	国分西遺跡	鈴鹿市国分町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「百」他
平瓦	国分西遺跡	鈴鹿市国分町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「勾」他
平瓦	川原井遺跡	鈴鹿市加佐登町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「領」
平瓦	三宅神社遺跡	鈴鹿市国府町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「小」
平瓦	梅田遺跡	鈴鹿市国府町	鈴鹿市考古博物館	押印文字瓦「中」





2004.1.17—3.7



## 鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 鈴鹿市国分町224番地

TEL 0593-74-1994 ・ FAX 0593-74-0986

E-mail [kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp](mailto:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp)

URL <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>